

---

# 契約書

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

契約書

### 【Nコード】

N9586M

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

十七世紀のフランスの町ルーダン。この町に赴任した司祭ユルバン・グランディエを陥れる為に為されたこととその惨たらしい結末は。実際にあったお話です。

## 第一章

### 契約書

十七世紀。この時代の応酬は魔女狩りの狂気の中にあつた。

これは欧州のほぼ全ての国で同じであつた。悪魔という存在が真実の存在とされ誰もがその影に怯えていた。そして教会の力は悪魔とまさに比例して大きかつた。

これはフランスも同じであり同じカトリックの国である神聖ローマ帝国やスペインと血みどろの戦いを繰り広げながらも教会の力は大きかつた。そしてその司祭達の力もだ。

ユルバンⅡグランディエ。聡明でありまた美貌にも恵まれていた彼がサンⅡピエールⅡデュⅡマルシュの司祭に就任した。彼はこの地域の司祭になるとまずは神には祈らなかつた。

先に書いたが彼は聡明であり美男子であつた。そしてこの時代の司祭にはよくあつたことだが政治家でもあり色好みでもあつた。彼は忽ちのうちに多くの政敵と愛人を作つた。

今で言う自由主義的な考えの持ち主でありこのルーダンという地域のカルメル派やカプチン派の者達と激しく対立した。というよりは彼が築き上げたその女性の人脈を駆使してカルメル派達に挑戦したのである。

そして執筆も行い論文や風刺詩において才覚を発揮した。それによつて多くの聖職者や地元の政治家を攻撃したのである。

また彼の好色も思ふ存分発揮された。地元の有力者の妻達や娘達を次々に愛人にしていった。そしてそれを隠すこともなかつた。彼は聖職者が妻帯することを主張した。これは信仰とは関係ないと主張したのである。

この主張が唱えられる背景にもバチカンの腐敗があつた。当時バチカンには聖職者であっても妻子がいることが普通であつた。あの教皇アレクサンドル六世にしても娼婦である愛人との間に子供達がい

た。その子供達こそがチエーザレ<sup>II</sup>ボルジアでありルクレツィア<sup>II</sup>ボルジアである。

こうした時代であり彼だけが取り立てて問題だった訳ではない。若しかするとその女性関係を隠さず妻帯を主張したのは彼なりの神への考えだったのかも知れない。だからこそ他の宗派の聖職者達を攻撃したのかも知れないし自由主義的、即ち先進的な考えの立場から旧態依然とした地元の政治家達を批判したのかも知れない。女性達とのコネクションを利用したのも当時ではよくあることではあった。

しかしである。彼はあまりにもむ無分別に敵を作り過ぎてしまった。敵を作らないということも政治においての術の一つだが彼は若かったのであろう。日本の首相であった竹下登はグレーゾーンを極限まで拡大して敵を作らずそのうえで政治を進めていったが彼はそれとは全くの正反対であった。

白か黒か、もつと極端に言えば自分と敵であった。そのうえ彼はその若さから保身の術も知らなかった。これでは運命は決まったも同然であった。

彼はとにかく女性関係が派手だった。ウルスラ会の修道院にも出入りしその院長であるジャンヌをはじめとして多くの尼僧達も愛人にしたのだ。

その彼女達は彼との関係に溺れながらも神への罪の意識を持っていたらしい。ここに彼の敵達が目をつけたのである。

とにかく敵の多い彼だった。すぐに密談が行われた。

「妻をたぶらかされた」

「娘を身籠らさせられた」

「従姉妹を愛人にされた」

「攻撃の文章を書かれた」

「信者を奪われた」

とにかくそうした人物がごまんと集まった。その彼等が一斉に密談をはじめたのだ。

「あのシスター達を使うべきだ」

「ウルスラ会のか」

「あの修道院のか」

「そうだ、あそこだ」

これまでは互いにいがみ合っていた地元の政治家達も各宗派の者達も今はグランディエー人を陥れる為に一致団結していた。その彼等が企んでいたのである。

「あいつはあの修道院にも出入りしているな」

「そうだな。あそこの修道院長は美人だ」

「確かに」

ジャン又は美貌の修道院長として知られていた。その法衣を脱ぐとブロンドの短く切られた髪とつぶらな瞳が現われる。その美貌が彼に目をつけられたのである。

「彼女は確かにあいつと関係を持っている。そして」

「そしてだな」

「他のシスター達とも」

「あの修道院にもだ」

一人が忌々しげに言った。

「あいつのハーレムになっている」

「忌々しい奴だ」

「しかしだ」

ここでまた言われるのであった。

「彼女達は今罪の意識に苛まれている」

「罪か」

「姦淫の罪だな」

「それを使うのだ」

こう話されるのだった。

「その罪を清める為に」

「その為に」

「何をせよというのだ？」

「悪魔の名を叫ぶ」

それだというのである。

「悪魔にたぶらかされてだ」

「そして道を誤った」

「そしてその悪魔とは」

「あいつだ」

既に答えは出ていた。これしかなかった。

## 第二章

「あいつがその悪魔だ。悪魔と契約した男なのだ」

「ふむ。それならばだ」

「その契約書を作るとしよう」

「そしてシスター達とも話をして」

「あいつをここで滅ぼす」

「何があってもな」

密室での謀略が行われたのだ。そうしてであった。

やがてその修道院においてだ。奇怪な出来事への証言が相次いだのである。

「悪魔です」

「悪魔が出て来ました」

「それが私達を誘惑してきました」

「そしてその顔は」

彼女達は次々に言うのである。

「そしてその顔はです」

「間違いありません」

「あの方です」

そしてその名前が出て来た。彼の名がだ。

「ユルバン＝グランディエです」

「あの方のお顔でした」

「間違いありません」

そしてこの話はすぐに町中に広まった。挙句にまずジャンヌが発狂した。

「グランディエ様！」

突然彼の名前を叫んでだ。狂った様に踊りはじめたのだ。

その踊る姿がこれまた異様であった。まさに何かに取り憑かれた様だった。

そしてその他の者達もだ。口々に彼の名を叫んで踊り狂い気絶していったのだ。

街は忽ちのうちに不穏な噂に包まれるようになった。そして多くの者が彼を指し示して言うのであった。

「悪魔だったのか？」

「怪しいとは思っていたが」

「やはり」

ここでデマコークを囁く者も混ざっていた。

「怪しいな」

「そうだな」

「明らかにだ」

酒場等でこう言つてであつた。人々を静かに煽動していった。

それを聞いた宰相のリシュリユーも動いた。彼は枢機卿でもあつたのだがその立場故かグランディエの風刺の槍玉の一つともなつていた。そしてグランディエの後ろに隣国にして当時フランスの宿敵の一つだったハプスブルク家が治めるスペインがいると噂されるのならば。彼としても手を打たない訳にはいかなかった。

「私を風刺する位なら追放で済ませてやつた」

彼は側近達に告げた。

「だが。スペインがいるとなれば話は別だ」

「ではやはり」

「消えてもらいますか」

「ただ消えてもらうだけではない」

ここでリシュリユーの言葉に剣が宿つた。彼は枢機卿という聖職者ではあるが戦場に立ったこともある。鎧を着て自ら戦う男でもあつたのだ。

「悪魔として消えてもらつ」

「悪魔としてですか」

「その名前で」

「そのうえで他の者達に見せるのだ」

その見せる対象が問題であつた。

「神聖ローマとスペインが常に我等を狙っている」

「はい、確かに」

「それは」

これは彼等は実によくわかつていた。フランスは神聖ローマ帝国を東に抱え南にはスペインが控えていた。両方共フランス王家ヴァロア家とは怨敵であるハプスブルク家の国である。彼等が常にフランスを害せんとしていたのである。

そのことを誰よりもわかつているのはリシュリユーだった。グランディエが気付いていないうちにスペインが彼の後ろに回って国の混乱を煽ろうとするならばだ。彼としては手を打つのが当然だった。「この上なく惨たらしい死を与えるのだ」

彼は密かに命じた。

「ハプスブルクに操られようとするだけでもだ」

「そうなる」と

「見せ付けるのですね」

「無論既に操られている者達もいる」

このことも既に見抜いているリシュリユーだった。

### 第三章

「そうした者達にも見せるのだ」

「末路はどうなるか」

「それを」

「そうだ。ではいいな」

「はい」

「それでは」

宰相の方からもグランディエに対する方針が決まった。挑発に誘惑、風刺に人脈作りには長けていた彼だったが保身は知らなかった。その為に彼は最も恐ろしい死を迎えようとしていたのだ。

リシュリユーの側近も街に来た。そして地元の実力者の中を動き回りだした。そうしてである。ウルスラ会の贖罪司祭のミニヨンという男が出て来た。彼は娘をグランディエに手籠めにされて孕ませられた裁判所の検事トランカンの甥であった。彼自身も信者をグランディエに奪われ風刺の対象となっていた。彼にとってもグランディエは憎むべき相手であったのだ。

彼は既に動いていた。密かに修道院に出入りしていたのだ。そして彼はここで最初から結託している地元の有力者や様々な司祭達、即ちグランディエの敵を一同に集めてシスター達の悪魔祓いをすると言い出したのである。

これに反対する者はいなかった。当然である。何しろ全て芝居であるからだ。こうしてその芝居が実際に行われることになった。

まずミニヨンの部下の僧侶達が彼女達を連れて来た。ジャンヌがいきなり暴れだしたのだ。

「取り押さえるのです」

ミニヨンは極めて冷静に部下達に告げた。

「そしてその悪魔の名前を言わせるのです」

「はい、それでは」

「すぐに」

白々しい芝居だった。だがそれでもそれは行われたのだ。そうしてであった。悪魔の名前を言わせようとするとだ。シスター達は急に暴れたしたのである。

そして僧侶達の手を振り解いて。何故か僧侶達の手は実に脆く外れてしまい後は追いはしなかった。そしてその間にシスター達は街の広場に出てしまった。

そしてであった。異様な舞台がはじまった。

シスター達は広場で乳房を出し腰を淫らに振って踊りはじめたのだ。誰もがこれには啞然となった。そう、何も知らない者達だ。

そして誰もが叫びだした。

「グランディエ様！」

「私と一緒に！」

「魔界に！」

「悪魔の快楽を！」

地面を転がりまわり頭を前後に激しく動かし肩を妙な風に捻り曲げたり腹ばいになり手の平を足の裏につけて海老反りになり中には口から舌を悪魔の様に出すシスターもいた。

「あれは」

「悪魔だ！」

「悪魔つきだ！」

ミニヨンが目配せをすると街の人々の中から声がした。

「悪魔がついたんだ！」

「間違いない！」

「あれは悪魔だ！」

そしてであった。その舌を出したシスターは身体をこれでもかと後ろにのけぞらせて恐ろしい速さで走り回った。そのうえで自分達とグランディエの関係を告白したのだ。

「これで間違いないな」

「そうだな」

「これで」

地元の有力者達はまた芝居をはじめた。

「あの男は悪魔だ」

「悪魔そのものだ」

「そして彼女達を誘惑した」

真実は最後の誘惑だけだった。しかし最早真実は芝居がそれになつていた。

そしてである。またミニヨンが目配せをしたのだ。  
するとまた人々の中で声がした。

「あいつの家のだ！」

「悪魔の家に行け！」

「悪魔を捕まえろ！」

「何があつても逃がすな！」

「これでよし」

人々がその言葉に煽られてグランディエの家に殺到するのを見てだ。ミニヨンも彼の傍にいるリシュリユーの側近もほくそ笑むのだ。  
つた。

「後はあれを出せばいいだけです」

「そうだな。あれをだせば」

「それであの男は終わりだ」

「それから」

既に彼等の考えは逮捕してからのことに移っていた。むしろここからが肝心だった。

## 第四章

「さて、どうしてくれようか」

「只では済ません」

「我等の怨み晴らさせてもらう」

「何処までもな」

その顔にはサディスティックでかつ醜悪な笑みがあつた。その笑みのまま彼等はこれからのことに思いを馳せていたのだ。どうするかをだ。

「殺す」

「そうだ、殺す」

「それでもできるだけ惨たらしくだ」

このことは決まっていた。しかもである。

「枢機卿様からの御言葉もある」

「そうか、リシユリユー様からか」

「それでは」

「あの男を消せとのことだ」

このことも言い添えられたのである。

「それも惨たらしくだ」

「それではです」

ここでまたミニヨンが涼しい顔で述べた。

「これを出しましょう」

「これは」

「契約書か」

「悪魔との契約書です」

見ればそこには錚錚たる魔神達の名前が書き連ねられていた。ベルゼブブにアスタロト、アスモデウスといった顔ぶれである。それは当時のフランス、欧州社会において邪悪だとされる魔神達の名前が全て書かれているといつてよかった。

そこにグランディエの名前もある。ミニョンはここでまた言うのだった。

この契約書を出せばあの男は終わりです」

「完全な止めか」

「まさに」

「はい、最早言い逃れはできません」

そこまでの力があるというのだ。

「例え言い逃れをしても誰も認めません」

「よし、それではだ」

「それを見せよう」

こうしてであった。グランディエを逮捕した。そのうえで彼を怒り狂う群衆の中に立たせてである。そのうえで彼にその契約書突きつけたのである。

「ここに名前があるがどういうことか」

ミニョンはそのことを問うたのである。

「これはだ。魔神達との契約のサインではないのか」

「そうだ、間違いない」

「それこそまさにだ」

「悪魔との契約書だ！」

「そうだ、間違いない！」

またしても群衆達の中から声がしてきた。

「やはり悪魔だったのか！」

「悪魔グランディエ！」

「地獄に戻れ！」

「死ね！殺せ！」

その声に煽られた群衆達が次々に言うてである。そうしてだった。ミニョンがここでだ。このことを言った。

「ではそれではこれより取り調べる」

「はい、それでは」

「魔女裁判を」

それを行うというのだ。欧州におけるまさに絶対の恐怖であった。この裁判と取調べにおいては実質的にどんな捏造や惨たらしい拷問も許される。グランディエを今その拷問にかけるというのだ。無論これも彼等の目的の一環であった。

拷問は酸鼻を極めた。吊り上げられ焼いたヤットコで抓られた。

その間誰もが口を極めて問い詰める。

「さあ言え！」

「悪魔と契約したな！」

「罪を認めるのだ！」

だがグランディエは何も言わない。あくまで口を閉ざす。そのうえで何も喋ろうとしないのだった。

しかしそれで拷問は終わらなかった。彼等はさらに拷問を行った。ジョウゴを口の中に押し込んでそのうえで水を注ぎ込んだ。腹が膨れ上がると人がその上に乗って踏み付ける。すると水だけでなく胃液や血まで吐き出す。恐ろしい苦しみを彼に与えるのだった。

しかしそれでもだった。グランディエはまだ何も言わない。もっともそれは彼等の嗜虐をさらに高めさせるだけでしかなかった。

## 第五章

今度は脚に楔が打ち込まれた。人の脚にである。骨が折れるところではなかった。肉が潰されその骨が中身まで碎かれ髓までが飛び散った。彼の脚は無惨なまでに打ち碎かれた。そのうえでまだ詰問するのであった。

「さあ言え！」

「悪魔だな！」

「悪魔と手を結んでいるな！」

それでも彼は言わない。少なくともこのグランディエという男の精神力は尋常なものではなかった。何があるうとも耐え切るうとしていた。

しかしこれは魔女裁判である。判決なぞ最初から決まっている。そうしてそのうえで彼等は言うのであった。その捏造を堂々とだ。

「これだけのことをしても白状しない」

「まさしくそれこそはだ」

「悪魔に他ならない」

「そうだ、悪魔だ」

こういうことにしたのである。どちらにしろ判決は決まっていたのだ。

「ならば悪魔を処刑する」

「そうだ、処刑だ」

「悪魔をだ」

こうして彼は火刑に処されることになった。しかしここでグランディエに対してこう甘言を囁いたのである。

「今ここでそなたの罪を認めるのなら」

「少なくとも火刑の前にだ」

火刑はわざと弱火にしてそのうえでゆっくりと焼くのである。これまた非常に惨い刑罰であった。欧州にはこうした刑罰が非常に多

い。

「絞首刑にしてやろう」

「それでどうだ」

「楽に死ねる……」

最早息も絶え絶えの彼にとってこの言葉はこの上ない甘言であった。そうしてそのうえで今言うのであった。

「わかった」

遂に頷いてしまった。そうしてであった。

グランディエの処刑が行われることになった。脚を無惨に砕かれた彼はもう動くことができなくなってしまっていた。それで歩くこともできず木櫓に括り付けられてそのうえで引き摺られていた。その彼を群衆達の罵声と投石が出迎えた。

「死ね！」

「地獄に落ちろ！」

「この悪魔がだ！」

彼は何処までも無惨な扱いを受けていた。最早人としての尊厳は何処にもなかった。

そしてである。彼は火刑台につなぎ止められた。そこにはもう薪や藁が堆く積まれていた。そして一人の僧侶がここで高らかに彼の罪を宣言した。

「さあ、今こそだ！」

「悪魔よ死ね！」

「どうあつてもだ！」

「焼き尽くされる！」

グランディエはその宣言をただ聞いているだけだった。彼は絞首刑で死ねると信じていたのだ。

だが彼を深く怨む者達はだ。そんなつもりは全くなかった。そうしてそのうえで彼のその火刑台の中にだ。火をくべてたのである。

「何っ……」

「悪魔はそのまま焼け死ぬのだ」

その彼に冷酷に告げた者がいた。ラクタンスという。

「苦しみ抜いてな」

「騙したというのか……」

「悪魔を騙しても罪にはならない」

これがラクタンスの言い分だった。

「わかったら死ぬのだ」

「おのれ……」

これまでにない怨みの言葉だった。それを出してである。

グランディエは言った。最後の言葉をだ。

「神はやがて御前達と私に裁きを与えてくれる」

そのずたばろになった身体での言葉である。目には血が滲んでいる。

## 第六章

「御前達は必ず神の裁きを受ける」

こう言つて炎の中に包まれたのである。美男と言われその頭脳も知られたユルバン「グランディエ」はここに無惨な死を迎えたのだ。

地元の有力者達も司祭達もこれを見届けて内心で喝采した。彼等にとつては忌まわしい女たらしであり政敵であり口汚い風刺家がこれで死んだからだ。リシユリユーも報告を聞いて静かに述べた。

「これでこの件は終わりだ」

「これでなのですね」

「彼は死んだ」

その端正かつ知的な形にした髭をほころばせもせず述べたのである。にこりともせず淡々としたものだ。

「政治的にはだ」

「政治では、ですか」

「そうだ。これで終わった」

淡々とした言葉が続けられる。

「ただしだ」

「ただし？」

「怨みは残るかも知れない」

リシユリユーはこうも言うのだった。

「怨みはだ」

「ですが彼はもう」

「死んだのですが」

「それでもですか」

「戦場には負けた者達の怨恨が漂うものだ」

いぶかしむ側近達に次に述べた言葉はこれだった。戦場で自ら戦つたことのある者だからこそ言える言葉である。彼は後に三十年戦争でも自ら指揮にあたっていた。体調を崩し担架の中でも指揮を執

つていたのだ。

「それと同じだ。そしてそれはだ」

「それはですか」

「残ることもある」

こう言うのだった。

「長い間な」

「では彼は」

「怨みは強いだろう」

そのことも見越しているリシュリユーだった。

「当然な。だが」

「だが？」

「政治として話は終わった」

リシュリユーは実に素っ気無かった。政治に徹していたのだ。

「これでな」

「では」

「御苦労だった」

ルーダンに向かった側近への労いの言葉であった。

「後で報償を与えよう」

「有り難うございます」

リシュリユーはこれでこの話を終えた。本当にこれで終わりであった。政治的には。

だが彼の最後の言葉は的中した。何と関係者達が次々に謎の死を遂げていったのだ。それはまさに呪われた様な死であった。それも一人や二人ではなく彼等は死の間際に彼の名前を叫んで苦悶の顔で死んだ。

修道院長のジャンヌは遂に発狂した。そうして彼とはまた別の意味で無惨な姿を晒して一生を終えた。彼女が壊れた真相も謎である。そうして街には彼の亡霊を見たという者が出て来た。それはこの時代だけではなく今に至るまで延々と続いていることである。

そしてその契約書だが今ではパリの国立博物館に残されている。

偽造であることはもう明らかになっているそれだがそこには確かに悪魔の名前がこれでもかと書かれている。しかしそこに書かれているのは本当に悪魔なのだろうか。悪魔とはまた別のどろどろとしたものが書かれているのかも知れない。人は目には直接見ないが心ではそれを見ているのだろうか。少なくともそこにあるものはお世辞にも美しいものではないだろう。それはこの一連の忌まわしい事件を見てもわかることだ。

契約書

完

2010・2・13

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9586m/>

---

契約書

2010年10月8日13時44分発行